

令和2年(2020年)5月21日(木)

公益財団法人広島平和文化センター

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館 副館長：大瀬戸

電話：543-6271

担当：橋本

小説家、大田洋子の遺影が登録されました

1 登録された原爆死没者

広島市出身の小説家、大田洋子（1903 - 1963）は、1945年1月、空襲の被害が続く東京から広島市白島九軒町の妹宅へ疎開しました。1945年8月6日、その妹宅で被爆した大田は、母と妹の家族と共に太田川の河原で二晩野宿した後、横川駅から汽車に乗り、佐伯郡廿日市町で一夜宿を借り、翌朝、かつて実家のあった佐伯郡玖島村（現 広島県廿日市市）へバスでたどり着きました。

廃虚と化した広島の前から避難する道中、大田は、「いつかは書かなくてはならないね。これを見た作家の責任だもの。」と決意し、まず、朝日新聞（1945年8月30日）に「海底のやうな光—原子爆弾の空襲に遭って—」を寄稿、続く11月には小説「屍の街」を書き上げています。「屍の街」では、「死は私にもいつくるか知れない。私は一日に幾度でも髪をひっぱって見、抜毛の数をかぞえる。」と、自らが被爆の後遺症に脅えながらも、「今度の敗北こそは、日本をほんとうの平和にするためのものであってほしい。」と平和への強い願いを訴えました。

2 遺影の提供者

中川 このみ氏 大田洋子の姪

3 遺影の提供について

登録された遺影をデータ（JPEG）にて提供できます。

提供者：国立広島原爆死没者追悼平和祈念館



大田洋子 (1903 - 1963)